

平成31年度 第1回 四万十町文化的施設検討委員会 議事録

日 時 平成31年4月21日(日) 13:30～16:00

会 場 四万十町役場本庁 東庁舎1F 多目的大ホール

出席委員 内田純一、谷口和史、林 一将、山本哲資、高垣惠一、池田十三生、
田邊法人、下元洋子、酒井紀子、刈谷明子

欠席委員 林 伸一、川添節子、青木香奈子、友永純子、中平浩太

事務局 川上哲男教育長、熊谷敏郎教育次長
生涯学習課(林瑞穂課長、味元伸二郎副課長、森山典将主幹、松田佐穂主任)
図書館・美術館(長木千葉美、谷脇八代美)

1 開 会

(事務局)

定刻となりましたので、平成31年度第1回四万十町文化的施設検討委員会を始めたいと思います。

開会に当たって町長の挨拶をお願いします。

2 町長挨拶

(中尾町長)

皆さん改めましてこんにちは。

今日は皆さん春先でお忙しい中、こうして来ていただきありがとうございます。

昨年の基本構想の策定においては、皆さん、他市町村と比べても非常に熱心にやっていたとご指摘もあり、町長として大変嬉しく思います。

今年度の検討委員会でも将来に向けての取り組みとして、有意義な委員会になりますように、心よりお願い申し上げます。

昨年は内田先生を中心に様々にご議論を賜りました。私が思いますに、この町の文化や歴史を様々に担っていただいた皆様、今も教育現場で取り組んでいらっしゃる方々、そしてこの町にお越しいただいたり生まれ育ったりして子育てをした皆さんが、将来を見据えてご参加いただきありがとうございます。

この会は幅広い分野からの階層で、心強く思います。これからもよろしく申し上げます。

今後の皆さんの委員会活動が素晴らしいものになりますように、皆さんが積極的に取り

組めますように、ご祈念申し上げます、開会の挨拶に代えさせていただきます。どうかよろしく願い申し上げます。

3 委員の委嘱

【今年度の委員に事務局から委嘱状を交付】

4 議事

(1) 文化的施設基本計画骨子（案）の協議

（内田委員長）

改めまして、またよろしく願いいたします。

先ほどお話がありましたように、3月に基本構想を決めました。この構想の中では四万十町の文化を四万十川に喩えながら、人々が築いてきた暮らし、歴史、文化をより引き継ぎ、そして新たなものを加えながら、生活に潤いをもたらしていくイメージで「文化」を描いてきました。

先ほどの町長のお話でもありましたように、その文化が産業や福祉や医療その他の事柄の下支えになっていくよう思いを込めて集めて施設を作っていくと思っていますので、引き続きよろしく願いいたします。

今日の進め方は、大きくは三つくらい考えております。

一つは基本計画について協議をしていきますが、とりわけ（基本構想(案)冊子の）第一章を中心に意見交換を考えております。第一章は基本構想を柱としているので、復習のようにはなりますが、改めてなぜこの施設が必要なのかを、後ほど岡本さんからもお話いただきますが、現代社会がどういうふうに動いているかも背景にしながら考えています。

二つ目は、明日（※4月22日(月)）図書館職員向けに学習会をしていきますが、この1年間で計画をまとめるに当たって、様々に町民の意見を伺う機会を作っていく今後の計画があると思うんですね。それについてもう少しご意見を頂ければと思います。毎月のように学習と協議を組み合わせながらその辺りの話を詰めていければと思います。

前回、こういうことをやってはどうかとご提案もありました。それに伴って町で考えていることも聞きながら、あるいは私たち自身ができることは何かを詰めていく形で進めていきたいと考えております。

そんな形で始めさせていただきたいと思います。

それでは最初に岡本さんにご説明を頂きます。

（ARG 岡本）

それでは、お手元に『四万十町文化的施設基本計画目次（案）』があるかと思いますが、これは前年度の最後の委員会で皆様にお配りしたものです。すでにあの時かなりの議論がありましたので、その時に出た意見を反映したものになります。

例えば第一章では、基本計画の重要な部分として、文化的施設が出来たら実際にどのようなに使われるのか、未来の予想図を絵に描いておこうというお話がございました。その時に皆様から、こういう人のストーリーもぜひ書くべきだというご指摘がありましたので、それを追記しております。

その他全般的に頂いたご意見等で骨子を組み立てています。しかしこれはまだ完璧な目次とは思っておりません。色々と組み替えながら、ご議論を頂きつつ、最終的にまとまったものにできればよいかと思えます。

全体的には第一章が基本方針として、基本構想でも示したことを再確認し、踏み込む所は踏み込んでいきつつ、第二章の「利用体験ストーリー」を具体的に肉付けしていったら、第三章が各自具体的なサービスについて記していくと。最後に第四章がこのあとの具体的な手続きとプロセスですね。建設計画やスケジュールを明記していくという形で想定しています。

それと本日は皆さんに観ていただきたいものがあります。今までもすでに議論になってますが、50年、100年という時間軸で考えた時に、今は大変な情報社会になってきている。これは単に窪川地域に施設を整備するだけではなく、大正・十和地域の図書館的施設ときちんと情報ネットワークで繋がっていくことがとても大事であると。そういう情報手段の活用を徹底的に行っていく必要があるという話が出ていたかと思えます。今後この辺に踏み込んで考えていく必要があろうかと思っています。

ちょっと皆さんに、内閣府が出している動画をご覧ください、このあとの議論のお役に立てていただければと思っています。これは現在、国が積極的に推している「Society5.0」という、これからの社会の在り方を描いた動画です。お手元に資料も配られているかと思えます。

すごく単純に言えば、狩猟社会から農耕社会になり、工業社会になり、現在は情報社会である。そしてこれが超スマート社会になっていく。10年20年、情報社会の大きな進展があると考えられています。実際に国がイメージしている情報技術の進展とはどういうものなのかを、これから5分ほどの動画を観ていただければと思います。

【「Society5.0」の動画が上映される】

(ARG 岡本)

結構現実味がある中身だと思います。ドローン宅配とか一見絵空事ですが、楽天とイーコマース会社はものすごく研究しています。

これを四万十町の皆さんに観ていただくのがいいと思ったのは、四万十町の現実にかなりマッチしている話だと思ったからです。都市部で導入されるより、地方部のほうがこういう技術の導入は早く進むと考えられていまして、おそらく今から10年以内だとまだ絵空事かなと思いますが、20年後だとかなり現実になっているかと思えます。ですから皆さんの

お子さん世代が大人になる頃には、確実にそれが現実化している時代を生きていくことになるかと思えます。

今年度の基本計画の協議に当たって、情報システムをどういうふうに捉えていくか、どういう距離感を保つかという話もありました。ですからこれからの話において空理空論にならないように、現実的に、社会はこれから加速度的に進展していくのかを押さえた上で、皆さんがどういう前提で考えていくか。こういう技術が発達していくならどういことができるようになるかなども視野に入れてご議論いただければと思います。

具体的に申せば、例えば移動図書館サービスは四万十町の場合、現実的ではないかもしれませんが、ですがご自宅にドローンで文化的施設から配送するという事は、決してありえないことではなくなってきました。そうすると大正分館や十和のセンターに向向くことすら難しいシニアの方にとって、非常に便利な技術が出てくるかもしれません。ぜひそういったことを絵空事と思わずに、ご議論いただければと思っています。

なお、2022年、オリンピックイヤーとされていますが、各種携帯電話会社がアピールしていますが、皆さんがお持ちのモバイル通信速度が100倍くらい一気に速くなることになっています。想像を絶するほど速いです。おそらくオリンピックイヤーにおいて、大きな技術的革新が起きると考えられます。つまり文化的施設がオープンする頃には実用化されているということもありえますので、その辺を視野に入れていただければと思います。

以上の主旨で皆さんに動画を観ていただいた次第です。

(内田委員長)

ありがとうございます。

この動画が2040年を想定してるんですね。ほぼ20年後の社会を描いているんだと、解説してくださる方はおっしゃいます。決して相当先のことを言ってるわけではない。

どうでしょう。今ご覧になって驚かれた部分もあるかと思いますが、なんかできそうな気もするかと思えますし。逆に、だからこそ大事にしなきゃいけないことは何なのかっていうことも含めて、自由に感想を言っていただきたいです。

(池田委員)

AIという社会が身近なものになっていますが、私の年代になるとなかなか大変かなと思っています。

この前知り合いの車が変わってると言ったら、自動運転ではないけれども自動的に停まる車ですよ。それからこの前、87歳のお年寄りの車が暴走したりしましたが、ああいう、ボイスとかなんとか付いていると、嫁さんが乗せてくれなくなったとか。

私もこの間、(携帯電話を)スマートホンに変えましたけど、花を認識するという機能がありまして、写真を撮って「この花は何?」と言ったら五つくらい候補を出してくれますね。候補の中にない花もありますけどね。

これはなかなか付いて行けない歳になりつつあるなと感じるところでございます。

(内田委員長)

ありがとうございます。

撮った花や魚を尋ねて、その候補の中にあるものについてはご自分で分かるとか、非常に使いこなしてらっしゃると思いますよ。

他にはいかがでしょうか？

(高垣委員)

なるべくそういう物に触らないように歩いています、そうもいなくなってきたなと思うことがたびたびあります。

最近では会議をしても、周りの人たちがそういうものを使って、次の料理の注文をする時なんかパッとその場で注文できることがあって、もし私が一人で生活するようになったら絶対できないよと思ったりしています。すでに時代遅れですので、これからますます大変なのかなと。

(内田委員長)

ありがとうございます。

今とても大事なことをおっしゃいましたよね。

やっぱり使うのは人間なのであって、機械に「使われてしまう」ことについては考えないといけないし、「もうこんな世の中になったら自分は生きていけない」と思う人が増えてしまうのであれば、それは使う物としては望むものではないですね。生きやすくするためにこれらをどう使うかが大事なので、「これで自分たちは終わりか」という状況が広がってはいけないですね。

どういうふうに使っていかを、むしろ大事にしていくプログラムが必要なのかもしれないですね。高垣さんがおっしゃることも真っ当だと思うわけですけども。

(山本委員)

僕が今一番悩んでることは、田舎の人たちが買い物できなくなってるということです。行商に来てくれた人たちが突然いなくなって、明日からどうしようというおばあちゃんが近くにいるんです。これを解決するというのであれば、金銭的な心配もしますが、これは田舎中の田舎にとっては有意義な力になるんじゃないと感じました。

(内田委員長)

ありがとうございます。

岡本さんが、こういうのは都会よりも田舎のほうがメリットがあるとおっしゃいました

が、今の話がそうですよね。今まで来ていた人がポッと来なくなっただけで、完全に孤立してしまう状態が生じる。そういう時にこれを繋ぐことは、まさに特色を活かすことになりません。

おっしゃったようにいくらかかるのか、コストやそのための条件整備についても不十分でしょうし考えないといけないことですが、可能性としてはありうるんじゃないかと。

(林(一)委員)

今の動画を見せていただいて、遠くない時期にはこうなるんだという思いでした。特に私はこの会では最年長ですのでだいぶ遅れているかもしれませんが、一生懸命インターネットやPCなんかも、これからもっと進んでいこうからと勉強して、一日一度は必ずPCの前に座って奮闘しております。

私は古文書なんかも研究しておりますが、ずいぶんと複写が綺麗なものが出来て、解明処理が非常に便利になっております。今度建ちます図書館・美術館にもそういう先端技術を取り込んだ形でないと時代遅れになるんじゃないかとも考えております。

委員長や町長からも、この計画はスピード感を持ってやっていかなければという話がありましたが、本当にそう強く感じました。新しい時代に応じた運営が何かも、先を見越して進まなければと感じながら、毎回この会に出席させていただいております。

やはりこの世の中の進み具合が急テンポですので、この委員会も慎重にしながら先へ進み、そして四万十川流域にあります四万十町が特徴を活かした形で、住民と一緒に最大限に使えるような施設を計画して、建築していく。そういった感想です。以上です。

(内田委員長)

ありがとうございます。

最後におっしゃった「住民が最大限に使える」というものを目指していきたいですね。

林さんは古文書を読むのがご専門ですから、その映像を綺麗にコピーしたり、新しい施設ではそういう最新鋭の技術で子どもたちが綺麗に見られるようなものも増えたらいいですね。

今後とも、これから出来る施設にそれぞれの専門家から「こんなことができればいい」とたくさん思われるんじゃないかと思います。池田さんも、そういう技術を使ったやり方もありますし、高垣さんは絵を描かれますが、ご自分の専門的視点から言って今の映像を活かすとしたらこんなことができそうだというものをお持ちだと思いますので、追々出していきたいです。

学校のほうはいかがでしょう？

(田邊委員)

一番は、授業がかなり変わるんだと分かるので、変わる先をどうイメージするかと、教育

現場でも、中山間だからこそ都会とは違って繋いでいく機械を使って都会ではしてない取り組みは、可能性はありますが、その可能性を自分たちが想像できるかがなかなか難しいので、そこら辺のギャップですね。「Society5.0」の進み具合に自分たちの想像力が追い付いてない分、進み方が遅い部分が多々ある。ただそんなことを言いながらも県が遠隔授業を推進しようということで今年、高知県のほうで拡大しまして、教育センターからも配信ということで、その内授業も配信できるようになっていくだろうとは言われますので、そういう授業がかなり変わるし、教科の一個一個の中身自体がすごく変わってくるんだらうなど。教え方と、教える意味みたいなものも。英語なんかも、最近ポケットトークがかなり発達してきたじゃないですか。ああいうので、英語教育のモチベーションって何だろうなっていうか。それから、だからこそ山本先生の言うアートの力とか、体育系とか、そういう部分の重要性が増してくるんだらうなど。そういうことの中身の変え方が難しいなというのが、授業に関するところかと思えます。

もう一つは進路指導がかなり難しくなる。今でもかなり難しいですけど、予測が立たないので、予測が立たない将来に対してああしたらこうしたらとアドバイスをする指導で生徒に安心感を与えることはいいのかっていう。20年後、今まさに自分たちが相手にしている子どもたちが30歳40歳になる時に、ああいう世界が来る中、従来の進路指導しかできていない我々の指導の仕方が果たしていいのかと思ってるんですけど、だからといって正解があるわけでもないだらうし、じゃあどんなことが、自分たちが生徒たちにフィードバックしながら、20年後を見ながらできるのか模索している感じです。社会の変化が激しすぎてというところはちょっと考えました。以上です。

(内田委員長)

ありがとうございます。

この映像を観て一番困っちゃうのはたぶん学校の先生ですよね。子どもたちを前にして、今まで自分がやってきたことを変えながらやっていかなきゃいけないくて、インパクトがありますが、おっしゃったようにそういう所を含めて地域の施設は学校や先生とどういう連携を取れるかも非常に大事な視点ですし、先が見えないからこそ、その先を見つけるための手がかりを得るかという時に、昔はどうだったんだらうというふうに、逆に過去、人間がどう生きてきたのかに、案外素朴な答えがあるかもしれない。そういう意味では、歴史が疎かにされているわけでもない。人間の生き方はそんなに大きく変わるわけではないですよ。そういう生き方や価値観をどこが繋ぎ止めていくのか。技術革新はどんどん行くわけですが、そうはいっても大事なところはどこなのかといった時には、歴史や地域の大事にしてきた固有の価値はどこかが受け止めていなければならない。なれば学校なりこういう文化施設なりですよ。

なので、今のお話を伺っていると、どんどん変わって先が見えないからこそ大事にしたい教育の部分がよりあるのかと考えてしまいますね。

(下元委員)

さっきの映像を観て、自分も、付いて行けないと思う所もありました。元々自分も機械類は好きですが、それでも音声認識ができて文字入力されるのにびっくりしたりして、目覚ましい発展にちょっと付いて行けるのか不安は私にもあります。

ただそのたった一つの機能がその人の人生を変えてしまうというものは本当に思います。例えば iPhone のアプリで最近出会ったものに、世界中の人とカラオケができるアプリがあって、それを知ったばかりに毎日そのアプリで英語でやり取りしてます。そしたら英語を学びたくなくて、人間関係が出来るからストレスが溜まりにくくなって、人生変わったな、って思ったんですよ。

こういう AI の機能がどんどん良くなることによって、人の「困った」を助けられるものがいっぱい出てくると思います。だから一つ、どういうことに困っている人がいるかを知ることができるのと、助ける機能にどういうものがあるか、双方をよく知ることが大切だと思いました。双方の専門家、例えば困ってる人の声を知るためには各種のライフプランナーや、介護によく携わる方の声も必要なんだろうし、そういう声を拾えたら、それにはこの機能が役に立つと分かるんじゃないかと感じました。とてもいい映像で可愛らしかったです。

(内田委員長)

ありがとうございました。

改めて声を拾っていきたくなるような映像でしたね。冷蔵庫に話しかけるなんて不思議な感じがしましたが、いずれはそんな世界になってくるんですよね。

(酒井委員)

最初に映像を観て感じたことは、江戸時代の人の一生分の情報を、今の時代の人是一年分浴びているので、情報処理の仕方から全てが変わっていて。

あの映像をテキスト化しようとしたら膨大な数になると思ってて、そうなるとう共有化するための視覚化が必要で、視覚化するためのデザインセンスも必要になるから、その部分は教育部分で、よく田舎の子が文化資本が足りないとか、教育格差で学びたいように学ぶことができなかったり、日常で触れられなかったりに関しては、今度の文化的施設にすごく責任があると思ってて、文化的施設が出来るまでの経緯もすごく大切だと思いました。

それこそ今は移行してる時期なんで、皆さんだけでなく私も付いて行くのが精一杯で、私たちが受けてきた教育も、今の子どもたちは違うことを要望されているから、20年後にイメージするためのサポートというかハードルを段階的にやっていく取り組みはみんなに必要なだと思いました。

今読んでいる本の田中素子さんはアナログ方面からまちづくりに取り組んでらして、一階に生き物と接する場がないと、奥まった場所や二階でやられても生身の人間としては接

しにくい場合があるので、文化的施設が出来る時にも、20年後のハイテクに思いを寄せると同時に、四万十川の生態系や、人間としてのリアルにどう本と接するのかの方法はあると思っています。

例えば本をドローンで運んでくれるといっても、本を借りるとイメージするためにはやっぱり生の本を、映像でもいいから。テキストでただこの本借りられますよって来てもイメージが湧かない。子どもたちはやっぱり絵本の表を見て絵本を選ぶわけで、そういった工夫はドローンが配達してくれるようになって、手前の段階で要ると思いました。

(内田委員長)

ありがとうございました。

本を借りる手立てを知っていても、本を借りたいと思うかは別問題ですよ。借りたいと思う意欲や意思をどう育てるかが一方にないと、手立てばかり良くなってもサービスは広がっていかない。一階部分はむしろリアルなイメージで、二階三階にそういう世界が広がっていくイメージですよ。

(酒井委員)

生き物としてリアルに空気感で分かるものも一緒に育てていかないと、一挙にハイテクなものだけ入れても、どう活かしていいかが分からない。

(内田委員長)

そういうものを大事にする施設でありたいですよ。
ありがとうございます。

(刈谷委員)

私も皆さんと同じような意見です。

例えば東京に住んでる人と「本屋さん行きますか？」って話してて、田舎には本屋がないですが、本を買おうと思えばどこでも買えるし読めるんですけど、本屋に行って本の背を自分の目で見て、「あ、こんな本あるんだ」とか手に取る機会は、田舎に住んでると情報を得る術がないということなので、もちろん情報を得る術を持つてる人はあれですけど、偶然の文化との出会いのきっかけは田舎にあるとすごくいいなと思ってたので、それがこれから出来る四万十町の文化的施設には求められると思っています。

先ほどの映像も不自由な所が自由になるとあって、社会的に困ってる人を助ける手立てとしてはいいしこれからそうなるんでしょけど、使う側の意識や知識の底上げが必要で、それは子どもだけじゃなくて、これからの情報化社会を生きる私たちも、生涯学習という意味でそれを支える役割も文化的施設にあると思っています。

私が生まれた時にスマートホンはなかったわけで、きょうだいの時にはスマホがあった

ので、そこでもう 10 年くらいのジェネレーションギャップを実感しています。生きていく上で学びを続けていくことが、これから生きていく全ての人に必要だと思っているので、住民側や使う側、困ってる人たちがどうしたら困らなくなるのか考える、または助けてもらえる窓口の役割としての文化的施設でもあると思いました。

あと、ああいう便利な物を入れるにはお金が必要で、それは予算がないと取れないわけで、そこも含めてさっき町長が言われた移住者の覚悟は大切で、これから自治体はどんどん人が減っていくわけなので、地域が生き残っていくためにはここに住む人をどんどん増やしていかないと税金も増えないし、量産も減っていった大変だなんて思いました。

(内田委員長)

ありがとうございます。

大事な言葉がたくさん出てきましたね。刈谷さんからは、使う側の底上げが絶対に必要だったことですね。常に技術は進歩していきますから、学び続ける状態を保っていかなきゃいけない。それからその中に偶然の出会いがあって、全部用意されている中から選んでくださいじゃなくて、「その他」、用意されていないものと出会う。そういうものを大事にする時代が来てるんじゃないかと。

酒井さんがおっしゃいましたが、それがイメージできて実際に自分が使えることは全ての人に必要ですね。共有化、見える化するために。この施設に行ったらそれが見えるというような中身を作っていく必要があるということですね。

ありがとうございます。大事な言葉がずっと出てきていると思います。

(谷口委員)

僕も少しだけ、皆さんとてもいい意見を言ってくれましたので、似たようなことですが。

あの映像を観て僕が思ったのは、結局、時代が 100 年かかったものが 10 年単位になって、まだまだ進歩して、いずれはああいう時代が来るだろうと思って。本の宅配にしても、ドローンを使っての配達ということで、それはいいんですけど、何を配達してもらおうか。

何を選択して、ドローンに運んでもらうか。本なら本ですね。その前にどういう本があって、どういうものがあるかを開示して、それを分かりやすい環境を作ってからでないと、ドローンの配達も役目を果たさないと思います。

それと、この地方は県民性、それから、それぞれの住民性がある地域があって、独特の県民性や住民性や国民性があるわけですが、AI が便利になって同じ情報を共有してしまうと、一旦人間の精神構造が破壊されるんじゃないかと懸念します。

人類は失敗をしながら、二度とその失敗をしないという教訓を与えながら、違うものを作っていくって、その積み重ねの上に現在の社会が成り立ってるわけですよね？ 急速に発展すると人間の精神構造は付いて行かなくて破綻してしまい、人類・文明が失敗してしまうという事例もあります。その辺は僕なんか考えるようなことじゃないですけど、一国民とし

で思うのは、そこら辺をどう修復して補填していくか。でないと学校、あるいは地元で教育していても、急速に伸びてくるものに対して不安を感じるわけです。

単純な例で言うと、僕はソフトボールをやっていますが、指導してて、急速に伸びた子はそこで止まってしまいます。僕は今まででそう感じています。ある時に一気に伸びて、あとは順序よく伸びたら心配ないのですが、伸びすぎると、その子はそこで成長が止まる。今までの経験ではそれがあるので、とにかくそういう時には急がないことで、集中して詰め込まずに、逆に教えなかったりしますね。最後にちょっと話をただけで、その子の成長を見守ったという、僕なりの経験があります。

ですので、そういうのはかけ離れてますけど、やはり順序よく育てていくことが何事においても仁義ではあるけど、非常に大切な、「育む」という言葉、あるいは「熟成していく」という言葉を消失するんじゃないかと感じます。以上です。

(内田委員長)

ありがとうございます。

あくまでも人を育てる施設なんですよ。教育文化施設や学校は。

改めて、人が育つとはどういうことなのかを常に考えながら進まないと、それに追いついた人だけで、あとは使い捨ててみたいになっちゃうことも結構あるわけですが、一人ひとりがかけがえのない存在であり、その育ち方にも順序にもみんな個性があるわけですよ。そういうものを失ってはいけない。教育施設、文化施設というのであれば、何を大事にしていかなければいけないかを言っていたらいいなと思うながら伺っておりました。

今言っていたいただきましたが、私がもう一つ考えることは、自治体職員の仕事のやり方も変わってくるということです。役場の仕事はどう変わるかはあの映像には出てきませんでしたが、職員の方もここにいらっしゃるので、自分たちはあの映像をどう見たかをちょっと聞いてみたいのですが。

熊谷次長、いかがですか？

(熊谷次長)

では役場の立場と個人の立場で一言ずつ。

やはり私たちにとっての技術革新は FAX です。FAX が出たところで大きく仕事が変わりました。それまでは郵送すればよかったんですが、すぐに書類を送らなきゃならなくなりましたので。それでも手書きという部分が大きく残ったりもしましたが。とにかく時間が稼げなくなった。1~2日は余裕がありましたが、FAX が出てからその猶予も許していただけなくなりましたね。さらに今はメールなどになってますので。

さらに言えば PC に変わったので、そこが大きかったと思います。時間の制約は今後ますます厳しいのかなと思います。

個人的には、私は音楽が好きですので、ギターをやっています。音楽ではチューニングが大

切でして、昔は音叉で音を合わせていましたが、今は機械で合わせます。でもやっぱり最終的にぴったり合わせたい時は自分の耳で合わなければ納得いかなくて。

これからやっぱり技術は高くなるんですが、人間の耳で合わせたという喜び、そういうものはずっと残していったほしいと思う。技術も喜びも残していったほしいし。

仕事であれば充実感のある仕事ができたといい気持ち、それから趣味であれば、自分の力を信じてやってきたという喜びを残すべきだと思う。

文化的施設についてもそういう便利さは大いに便利でいいんですけど、この感性や喜び、ずっと私たちが感じているものを持ち続ける施設であってほしい。以上です。

(内田委員長)

ありがとうございます。

喜び。自己実現。やりがいというものです。人間はやはりそういうところに感じるものがある、それらが感じられることを大事にしていきたいということですね。

もうちょっと若い職員の方にも伺いたいのですがどうですか？

(図書館員)

四万十町立図書館の長木です。

映像を見せていただいて、時代がすごく変わってきたと思ったのと、自分もそれこそカセットテープから CD から MD、DVD なんですけど、MD が廃れたみたいに、未来はこうなるかな、と思ってはいても、廃れて残らないものと、残っていくものがあったりして、四万十町の人たちが何をしたいか、自分たちが何を届けたいかがあって、そのサービスはたくさんあるけど、チョイスしてやっていくようになるんじゃないかなと思って、ドローンで本を届けるのいいなって思ったけど、一冊だと軽いんですけど何冊もになると重いなあとか、雨の日どうするのかとか思ったり、なかなか自分も、図書館で働いてて、高齢の方が来てくださって、おばあちゃんになって体が上がらなくなって、字が見えにくいだらうから大活字本とかあったらいいだらうなって、1冊 3,000 円もして、1冊の本が二つに分かれて 6,000 円くらいになったりして、そういう本なんですけど、ちょっとでも住民の方が読みやすいものがあったらいいなと思ったりして、何を求められて何を届けるかによって、またランニングコストもあると思うので、ずっと続けていけるものをできたらいいなと思いました。

(内田委員長)

ありがとうございます。

やはり一人ひとりのニーズに応じてきめ細かく届けるところをもう一つ新たなサービスを展開できそうな気はしますよね。「届ける」という一つのキーワード。以前は「来てもらおう」という感じでしたが、そうではなく「届けていく」のが大事なことになるかなという話でした。

司書の仕事もどう変わってくるのか。これも専門分野で議論があると思いますが、単に検索能力が高ければいいかというところでもないわけですよ。どういう専門性を持った人を私たちは求めていくかというところとも関連します。ありがとうございました。

時間が経過しましたので、ここで休憩を挟みます。休憩後は岡本さんから少し意見を頂いて、次に入ろうと思いますので。

【10 分間休憩】

(内田委員長)

それでは再開します。

今日最初は、そもそもなぜ施設が必要なのかで、考えておかなければいけないことがたくさんありました。特にこの DVD にあったように、社会をどう考えていくか欠かせなくて、言ってみれば基本計画の第一章でしっかり押さえておきたい事柄ですし、だからこそ先ほど話した人間が育つということに欠かせないものという視点に繋がっていきます。

皆さんや行政側にもご発言いただきましたが、岡本さん、いかがですか？ 皆さんの発言をどんなふう反映させるか、アドバイスを頂けたら。

(ARG 岡本)

まずはご議論をありがとうございました。

所感を述べますと、適切な距離感というところが重要かと思います。技術が進展していくと必ず起きる問題は、技術の仕組みがよく分からない、付いて行けないという声もありましたのでよく分かります。私も 10 年間、先端 IT 企業で働いてきましたが、辞めて 10 年経つと、「もう付いていけないな」というのが正直なところです。

一方でこれから生きていく世代にとっては、その技術の中身をきちんと理解すること、それを使うにせよ使わないにせよその技術がどういうふうに出て上がっているかを知るといふ、ある種のリテラシーがますます欠かせなくなっていくと思います。

そういう意味ではやはり、新しい文化的施設の中で、この町に生まれ育っていくこれからの世代がそういったリテラシーを育める図書館・美術館である必要があると思います。

例えば一つ、人工知能や AI が近年話題になっています。でも実際、ドラえもんのようなすごい人工知能とかそう簡単には登場しません。ですがパターン化された事柄、例えばさっきの映像の冷蔵庫は前から結構研究されてますが、冷蔵庫に入ってる物ってそんなに変わるわけじゃないんですよ。例えば卵のパックがある、牛乳がある、それが無くなったら買い足すというのはごく日常的に行っていることで、比較的学習がしやすい。結果、ああいった仕組みが出来ます。最近ですと報道でも聞かれますが、人工知能によって今まで発見できなかった病気が早期発見できることもあります。

ただ、一つ考えるべきは、人工知能に「あなたはガンで余命 3 ヶ月です」と宣告された

時、受け入れるかどうかは全く別問題なんです。病気の診断において人工知能が人間の判断を上回る日はそう遠くないと思います。ですがそれを受け入れられるかは機械や技術以前の話。もう3か月、死ぬなら死ぬでいいや、と思うか、最後まで病気に抗って生きて生き抜くぞ、と思うかは全く別の問題です。

私は文化的施設で新しい世代にそういった価値観を伝えていくことも大事だと思っています。ですから技術をそれはそれとして理解することと、その技術とどのような距離感をもって生きていくのか、それを、こういう町だからこそ積極的に取り入れていくことが欠かせないと思っています。

それ以外の点で、今後具体的に計画を策定していく中で考えていただくとよいのは、ある程度の利便さや使いやすさを実現するために情報技術をどう実現していくかを、計画の中にぜひ盛り込んでいければと思っています。

よくある図書館の基本計画ですと、大概の場合、「自動貸出機を入れます」「蔵書が検索できます」、その程度のことしか発想されていません。でも、例えば福井県鯖江市という、福井市の南にある図書館のシステムですが、「机なう」というものがあります。これは鯖江の図書館の学習席の、今まさにこの時間このタイミングの利用状況を示します。これは鯖江の女子高生たちの発案で始まったものです。学習席がどのくらい空いているかがリアルタイムで分かるならもっと図書館に行きやすい、勉強しようと思って図書館に行ったら席が全部埋まってたと、そういう声を受けて数年前に作られたものです。これは技術的にはそんなに難しくない。椅子にセンサーを付けておいて、10分間圧力がかかればそこは人が座ってないと見なして表示します。こういったものは充分、実現可能だと思います。これであれば、窪川高校の生徒さんが文化的施設に寄って勉強してこうかなって判断ができるわけですね。座席だけではなく、その空間がどれだけ混雑しているのかも、今の技術を以てすると測定することができます。

他には、高齢者向けの活字本の話がありましたが、いま Amazon でヒットしているのがオーディオブックです。日本ではあまり普及してませんが、海外、特にアメリカでは自動車移動が多いという事情が反映されています。日本だと通勤電車の中で、スマホで本を読むこともあります。通勤の車の中で、読み上げをかけておいて本を聞くというスタイルが一般的です。こういうのも文化的施設の中で検討してもいいと思います。私もスマホのビデオを観るのですが、人間老いれば確実に視力が落ちるという問題があります。もちろん聴覚にも低下は訪れますが、比較的何とかなるものです。実際死ぬその瞬間まで聴覚は生きているんだそうです。ですので目がつらくて本はもう読めないという方に対してオーディオブックの仕組みを提供することを、直近でできることとして考えてもいいと思っています。

それ以外に情報技術の活用という点で言いますと、昨年度私がアドバイザーをしていた岡山県津山市の図書館です。デジタルアーカイブといいまして、津山市の自然や文化、自治体の広報誌などで使われてきた写真が役所の中にたくさんストックされていますが、むざむざと死蔵するよりは、インターネット公開して世界中に発信しよう。そしてこれを誰でも

自由に使えるようにして、新たな創造活動に役立てていただくという仕組みを提供しています。こういったこともこれからの文化的施設の情報の仕組みの在り方として、今後の基本計画の中でどういうことができたらいいかご議論いただくとよいと思っています。

あと一つ、これはジャストアイデアですが、今は情報システムの話をしていますが、情報やシステムや技術との距離感を保つことを重視するなら、例えば文化的施設の中で一つスマホ全面禁止の部屋を四畳半くらい作って、「スマホ断捨離の部屋」として一切スマホ等を触らないための部屋を作るというのも考えてみていいんじゃないでしょうか。なかなかない取り組みですし、一方で文化的施設の中での時間の過ごし方の提案としてはありうることだと思います。

それ以外にも、スマートホン自体がいつまでも今の形のままでなく、より新しいデバイスに作り替わっていくと考えられます。先ほど申しました自動貸出機にしても、オーテピアなどに置かれていますがかなり大きいです。そうではなく皆さんスマートホンをお持ちです。スマホや携帯電話が貸出カードになり、自分のスマホで貸出処理をするといったことも、技術的には可能です。

この重要なポイントは、コストを抑えられる。自動貸出機は年間でリースすると数百万円かかります。便利で、人員を減らすことができますが、百万円単位の投資は大変なことです。正直そんなにお金があるならその分で資料や本を買う、美術作品を購入するほうが然るべきやり方かと思います。

そういった点では、情報技術を活用すればするほどコストを抑えられる、あるいはより適切なところにコストをかけることができるという側面もあると踏まえていただければと思います。以上でございます。

(内田委員長)

ありがとうございました。

岡本さんからは情報技術でできることと合わせて、それらとの距離感をどう考えるかのお話がありました。特に距離感は、文化的施設だからこそ言えることですので、文化的施設で過ごす時間をどういう考え方に基づいて作るかも大事です。

これから考える上での視点をまたいくつか出させていただきました。いかがでしょうか。ここまで考えたことや感じたことがありましたら、自由に出していただいて構いませんので。

(池田委員)

私は、コンピュータというものを教育委員会や町が導入して、160台ほどで町民に教えるということを体験したことがあります。そこから大体普及の初めですが、今後そういうことを図書館なりに行って習いたい、勉強したいと言って。

昔、花の調査に行った時に、スマホとガラケーのどちらを持っているかで半々でしたが、

それで地図を見られる人は全然いませんでした。通話ばかりでした。60代の人ばかり。

こんな感じですので、環境として文化的施設の中に、ちょっとここを習ったら、林伸一さんみたいな若い衆が周囲にいて習える環境があったらなんですけど、いくら優秀なお子さんがいても遠くにいるから教えてもらえないとかで知らない人がいっぱいいるじゃないですか。そんな人が行って勉強できる機会があれば、図書館へ足を運ぶこともあるかも分かりませんね。

(内田委員長)

そうですね。やっぱり使う技術も合わせて向上していかないと広がりがない感じがいたしますね。格差が開くだけになっちゃうんですけど。

とはいえ、そういう技術がなくてもできる部分を捨ててしまうわけではなく、時代の過渡期ということもあるかもしれませんが、スマホでしかこの施設が使えないなんてふうになってしまっただけでは、ますます距離が空いちゃう方も出てきますから、そういう講習をしながらも、そうでない人にとっても居心地のよい場所を合わせて考えることも必要ですね。両方をどうやって進めていくかという点ですね。

他にはいかがでしょうか。

(酒井委員)

岡本さんの話を伺って、デジタルデトックスベアを作ったら、みたいなものには私も思いつきがあって、それこそ岩本寺があるので、禅や瞑想も世界的に求められているワードでもあるので、そういう部屋が別にあることは他の図書館との差別化が図れると思いました。

フリー画像をデジタルアーカイブで提供することに関しては、ここに来るまでに刈谷さんともお話ししたんですが、行き過ぎた資本主義の感じで、お金のやりとりだけで物事が上手く回らなくなってきた面があります。特に四万十町は、物と物、物とサービスといったお金じゃないところで交流できる町民性もあります。仮想通貨までは行かなくても四万十町独自のサービスのやりとりが別個にあればと。フリー画像にしてもカメラマンの写真だと色々問題が起こることも思いまして、上手く言えませんが、新しい四万十町のルール作りがあると楽しいと思いました。

先ほどおっしゃった講習などでも、その人なりのハードルがあるので、それに添っていくことは司書のレベルが問われます。私は、学校には学校司書がいたら、先生たちがフォローできないところも個別に探求して、この本ならこういう見方があると言ってくれる方がいたら、子供たちの力になると感じたことがあります。

そうなるここに書いてある「そもそもなぜこの施設が要るのか」という「そもそも」を考える力がないと。まず図書館法を読んでおかないといけないとか、図書館法の前段に教育法があってその前段に憲法があってと、結局は基礎に立ち戻ります。町にしても町の構想計画をちゃんと読んでおくこととか、基礎の学ぶ力が求められている時代だと思うので、図書

館自体がそのリベラルアーツや哲学などが聞ける場であったら、力強い人材が育つとは思いますが。

(刈谷委員)

私が思ったことは、毎日図書館に来る人に対して、この人はどんな本を読みたいとか、どういうサービスができるかとかは、顔が見えて関係性が築けているので、分かりやすいしお互いにコミュニケーションを取りやすいと思います。

四万十「町立」図書館ということは、四万十町全体の住民にサービスを、ということだと思うので、図書館に来てない人来れない人来たくない人も含めて、全ての人に平等に、さっきの底上げの話とも通じますが、来てない人にどうやってサービスを届けるか、来れない人がどうやったら来れるのか、来たくない人が来くなるようにするにはどうしたらいいのか、そこも含めてサービスを考えないといけないと思っています。

町から投げかけだと、子供に関してはおはなし会やブックスタートをしています。その次の段階ではその場で本を配布せず図書館に取りに来てもらうことをしていますが、そもそも図書館に来ないから渡せないこともあるようなので、来ない潜在的な層の人たちへの働きかけも大事だと思いました。

(内田委員長)

ありがとうございます。

今日は第一章の意義と理念、なぜこれをわざわざ建てるのかを中心に話をさせていただいておりますが、それは二章三章の具体的なサービスを目標にどう展開していくかに当たりますよね。

そういう意味では、IT を初めとした技術進歩の光と影が、世代ごとにありますし、課題ごとにもそれが見えてくるでしょう。

さらに刈谷さんがおっしゃったように、全ての人に開かれた施設を目指すのであれば、行きたい人、行けない人、行きたくない人というもの物差しとして見ながら、二章以降をきめ細かく作っていくことに繋がる話だったと思います。さらに話を展開していければと思います。

(林(一)委員)

構いませんか？

今日の話は手の抜けられない話ばかりですが、今日辞令も頂いて、任期が 2020 年 3 月ですが、1 年とはとても早くすぐに過ぎるわけですが、その間に色々検討して具体化しなければいけないということですが、特に建設スケジュールで、文化的施設の位置と規模とか、計画設計とか、施設に必要な機能の在り方とかありまして、これは大きな柱になると思います。

それから第二章の、どこに建てるかということも、まだこれをはっきりしてませんが、四

万十町は予算のない小さな町でして、しかも地域が窪川・大正・十和の三つに分かれまして、それぞれ特徴のある地域が混在しております。窪川地域に建てると大正・十和が、その他に建てるとまた他の地域がという関連性が重要になります。

いま色々ご指導いただいて、理想的な四万十町の規模がありますが、規模には予算が要ります。今出ていますように、人口動態が、いま 17,000 人くらいです。先ほどの映像にも出ておりましたが、20 年経てば世の中がかなり変わると言われておりました。四万十町も今までの計画では人口が 1 万人を割るという予想も出ております。

そういったことを考えながら、今日示された基本計画を三月までに立てていくかのスケジュールも立てないと、我々の頭脳だけでは厳しいと思います。いつ頃までに何を決めて、任期の最後にはこういう形になるという、大まかなスケジュールを決めておくべきだという思いをもって審議をさせてもらっておりますが、どうでしょうか。

(内田委員長)

ありがとうございました。

後ほど公募の予定も含めてスケジュールの話をいたしますし、私たちがこの基本計画を作りながら、合わせて町民の意見を聞く場面を用意したいんですね。一緒に盛り上げていくような 1 年間にしようと思っておりますので、後ほどスケジュールの確認等したいと思います。

今日やっているところは基本計画第一章の核となるところです。これは言ってみれば三月に出しました構想から大きくずれることはありません。ただ、なぜこれを作るのかという点が、基本構想では書ききれてない部分もございまして、改めてどういう点に留意しながら計画を立てていくのかの意見を出ささせていただいて、おおよその方向は出ていると思います。

ご質問にお答えしますと、第二章でそれぞれの利用者、利用施設、利用地域を想定しながら、どういうストーリーが描けるか、どんな利用方法が望まれているか、どういうところに課題があるのかを整理しようと思っております。これについては五月～六月にまとめていきたいと思っております。

その間に、来月に渡辺梓さんの講演会を企画しておりまして、そこには町民の方にも集まっただいご意見を頂く場になります。同じ日に検討委員会をやりますが、特に第二章の利用者の体験の部分を中心に協議しようと考えます。

六月においても第二章を考えていきますが、実際に私たちが内子町に視察に行って、そこで学んだことを加えて第二章を詰めていく予定です。

とはいえ特に三章は、具体的なサービス目標及びそれに向けた管理運営です。二章のストーリーの中ですでにどういうサービスが必要かは自ずと見えてくるので、実は合わせて三章についても、こういうサービスが考えうるということをお話することになりますので、七月の会ではサービス目標について時間をかけてやりたいと思っております。

七月は町民フォーラムを開こうかと思っております。そこでは委員会の中からどなたか

出ていただいて「こんな図書館にしたい」とご発言をいただいたり、利用者の方にお話をし
ていただいたりしながら、どんな図書館があったらいいかのフォーラムを考えています。

五月六月と利用者のストーリーを詰めて、七月にはフォーラムを開きサービス目標や管
理運営をまとめようと考えているわけです。

八月は、町民向けの企画として猪谷さんの講演会を予定しております。合わせて第四章、
建設計画・スケジュールを中心にまとめられればと考えています。

九月には一定の中間報告ができるように考えております。十月以降にはパブリックコメ
ントが頂けるように進められないかと、大まかな予定でおります。

場所の問題ですが、場所が決まらなると議論が進まない部分も出てくるかと思えます。と
はいえ最初から場所に拘ってしまうと、限定された話になってしまいます。もちろん場所と
お金の問題はあるので、大風呂敷を広げても結局は、ということになるのも良くありません
が、第二章まではあまり場所の限定をしないようにできないかと思っています。もちろん情
報が必要であれば逐次、事務局にお尋ねします。町の動きについても情報を入れていただく
のも可能かとは思いますが、そこで一喜一憂するのは生産的ではないという判断を、私個人
はしています。

毎月のように委員会を開くのと、原案を事前に示してもらって話をするのが建設的であ
るはその通りですが、そこは私のほうでもまとめる努力をしていきますし、事務局にもご
尽力をいただくこととなります。

大まかなスケジュールはこんな感じです。

ですのでまず五月は、渡辺梓さんの講演会に合わせて第 2 回委員会を開くことになりま
す。

(事務局)

講演会と委員会を開く時間についてはこちらで調整させていただきます。

(内田委員長)

六月の委員会に当たる視察を愛媛県内子町の図書館でと考えております。先ほど事務局
と打ち合わせて、土日もいいのではないかとも思いましたが、先方の対応も考慮してその前
の金曜日を第一候補に進めております。日帰りになります。

それから七月の町民フォーラムですが、これは前回の会で、7月13日かどうかという話
があったかと思えます。この日より早いと学生は期末試験がありますし、遅いと夏休みに入
ってしまうので。会場はここ（役場東庁舎多目的大ホール）で、文化的施設に関連したフォ
ーラムを開催する予定です。

(酒井委員)

これが4回目の委員会ですか？

(内田委員長)

そうです。

ここでは自由に、町民さんの図書館に対する思いを出し合う場になるかと思えます。

基本構想は作っておりますし、現段階の基本計画でお話しできるところはここを出して協議をいただくようになるかと思えますが。手元に資料がないので口頭で申し訳ありませんが、この日に第4回検討委員会を予定しております。

(事務局)

八月の第5回委員会では、猪谷さんの講演会と検討委員会を一緒にという考えでしたが、夏休みも含めて日程的に厳しい部分もありまして、ここはまた検討してみます。

(内田委員長)

提案がありました十一月開催の米こめフェスタでも、ブースを用意して町民の方の意見を目にさせていただく企画を募ってやろうかと意見も前回ありましたので、その辺りについてもお話を進められればと思えますが。

まず図書館で考えている企画について伺ってもいいですか？

(事務局)

今年度については、動きの見える取り組みが必要というふうに図書館でも考えております。

米こめフェスタでも町民に、こちらがどういう動きをしているかをアピールする場が必要ですし、普段の取り組みの中でも図書館・美術館の取り組みをもっと皆さんに「見える」化していくために、先ほども図書館職員と協議をしておりました。

その中で、読書感想画・読書郵便があります。内々ですが非常に良い取り組みではないかということで、これを多くの人に見てもらえるようにすると、もっと図書館・美術館に近づいてくれるのではないかと考えました。従来これは美術館のみでの展示でしたが、大正や十和でも展示をして、子どもたちの作品を見ていただけるように考えております。具体的な企画や要項はこれから事務局でも話し合って、学校の図書委員の先生方に提案することになると思えます。現在は大正や十和のお子さんの出品が少ないこともありますので、そこも、地元で展示しますと積極的に大きく出して行って、図書館・美術館では今までこういう取り組みもしていて、これからもやっていきたいとアピールしようと思っております。

それともう一つ。皆さんの思いをどうやって伝えていくかでは、図書館に対する思いや夢を絵にしたらいいと前回の会に出ておりました。そういうことを出すのは難しいのかと思ひまして、去年のワークショップでやった短冊のように文にさせていただくのもアリかと考え、学校に対して、図書館美術館、そして学校図書館に望むことを短冊などでもいいので出

していただいて皆さんにお示しする場を作れたらと、いま企画をしております。

具体的になったらこの委員会でも提案しながら、新たな提案も受けていきたいと思いますので、ご協力をお願いいたします。

(内田委員長)

ありがとうございます。

実はとてもいい活動をされてらっしゃいますよね。読書感想文集をずっと出してらっしゃるとか。これをもっともったくさんの人に知っていただくことも必要ですし、活動をPRしながら、施設についても多くの人に意見を貰おうという企画を図書館でも考えていただいております。

特にこの文集の後半に、読書郵便というコーナーがありますね。上に読んだ本の絵が描いてあって、下段に感想文が書いてある。これが冊子の中で閉ざされている。この部分だけでも今度開かれるフォーラムなんかで壁に貼ってみたりして多くの人に知ってもらうことも考えられんじゃないでしょうか。

前回に窪川小学校の校長先生が、子どもたちに夢のある図書館を、あるいは自分の描く図書館を絵にしてもらおうかと言ってくださったので、そういう機会にもいいかもしれません。できるだけ子どもたちがいっぱい発表する場面が、町民の方や職員に表現する場になるわけですね。そういう形を図書館側で考えていただいていると。

場合によっては米こめフェスタで書いていただいてもいいですね。町民の皆さんに夢の文化施設を書いて語っていただくコーナーを用意することもできるかもしれません。

全て事務局をお願いするのではなく、応援団を作る動きもありますので、そういう動きを作っていければと思う所です。

ここまででいかがでしょうか？

(酒井委員)

役場の「今年度は取り組みを見える化する」というのは、読書感想文集を支所で見られるようにすることと、子どもたちが町民に発表する場を増やすために、絵や短冊で見られるようにというのが、本年度の取り組みだと理解していいですか？

(事務局)

図書館側としては、文化的施設の活動をしていることを一般町民にも知ってもらう取り組みが渡辺さんや猪谷さんの講演でもあります。

(酒井委員)

取り組みをたくさん出しているのは有難いのですが、単発的にやっても、最初に谷口さんがおっしゃった順序良く育むことが必要だとか、日常に溶け込んだり落とし込

まれたりするものがないと、いざどんな施設がいいのか問われてもすぐには答えられないです。

岡本さんはアトリエが欲しいと言った女子高生の意見が印象に残ったとおっしゃいましたが、そういう意見を常日頃出せる場があり、受け止めてくれる場所があること自体がすごく必要だと思います。

次の2020年度からは関係者のみの検討委員会みたいになるんですよね？ そのあとの2021年度が着工で、2022年度が出来上がりというスケジュールになってると思いますが、単発でやっても浸透具合が弱いし、本当の意味で汲み取れるのかを思うと難しいと思います。

読書感想文集にせよ支所にポンポンと置いたところで、やっぱりそこへ見に行かなければいけないのでサービスとしては弱いです。中身が面白い作品をカラーで毎週一枚、各家庭に配布するとかして、それで初めてこれがあると認識される。きっとお知らせしても見に行く人は果たしているのかを思うと、もう少し、地味に順序良く、日常に溶け込めたサービス提供があれば嬉しいです。

(内田委員長)

ありがとうございました。

確かに今はあるものを表に出すというだけでなかなか伝わらないでしょうけれど。

(事務局)

言葉が足りませんでした。文集を置くので見に来てくださいということではなく、展示会をするので一堂に並べたものを皆さん見てくださいという形を作りたいと思っています。

500～600点ほど、町内のお子さんの作品が出てくるので、全てを一堂に会して展示は難しいです。ですので、例えば十和地区であれば十和のお子さんが描いた読書感想画・読書郵便を、十和地区の一番人の目が集まる場所に展示していくなどして、皆さんに見える化をしていきたいと考えています。

文集については、今は発行していない状況なので、それも復刊できればと考えてはいますが、まずは皆さんに見ていただく活動をということで、今年度は企画して、今後も続けていけたらと思っています。

(酒井委員)

その展示期間は決まっていますか？

(事務局)

学校から出てくるのが十月～十一月になるので、それを見て1～2週間の展示になるとは思います。

(刈谷委員)

読書感想画は始まって何年ですか？

(図書館員)

正確な時期は今すぐ言えませんが、十年くらいのスパンから前に。

(刈谷委員)

その作品は子どもさんに返却してますか？

(図書館員)

全部お返ししています。

(刈谷委員)

でも文集としては残っている？

(図書館員)

そうですね。何年か前までは学校図書館と共催で、学校図書館が感想文集を、図書館は読書感想画・読書郵便を担当していました。そうして一冊の冊子にして残していましたが、学校図書主任会で冊子を作るのが難しくなって廃止になりました。

冊子にはなっていませんが、応募して審査という流れは今も続いています。

(刈谷委員)

もし長く続いてるのであれば、これまでの作品を展示すると、時代によって違いが出て比較できたりして、見に来る人も今の子どもたちだけじゃなくて、かつて子どもだった今の大人とか。子どもだけに特化せず、広い層を対象としてできればいいと思います。

絵は返しているのであれば、文集に載ってるものをコピーして展示するとか、内容の工夫がもう少しできると思いました。

(事務局)

ありがとうございます。

データ等、残っているものがあれば活用して、時系列で見れる工夫もあつたらいいと思います。

(内田委員長)

ありがとうございます。

作品は返却しているとのことですが、今回は返さずに、あるいはコピーを取ってみては。

500点を超える作品が集まるとして、順番に出していかないといけませんね。一度に出すのが無理だとしたら何か所かに展示してみるとか、工夫をしていただきながら。

要は文化的施設が出来るとあって気運を盛り上げる、またはできるだけ多くの人の心を集めるような意味がありますよね。そこに向かって動いていただくのもいいかと思えます。

それから、講演会はチラシにある分も含めて実施しますが、他にも何か催してみたらいいということはありませんか？

(ARG 李)

読書感想画について、先ほどの話の中にプロセスのデザインも大事だというお話がありました。まさにこれもデザインが必要だと思います。これを続けてきたということは大変素晴らしいですし、これを続けつつ新しい施設作りに繋げていくことになった時、新しい施設が出来て展覧会等をやりますという過程を作って、一か所に限らず、それぞれの地区にも図書館機能を整えていくことをある種のシミュレーションとして実施する。こういう施設が出来ますのでこういう展示をやるとした時に、それをちょっとシミュレーションしてみまじょうと、そういう意味でストーリーを作るだと思います。

西ノ島町の場合は、本の表紙を描いて、その表紙の本が新しく出来る図書館に入るとします、どんな本がいいですか、というところに皆さんの思いを込めてそれぞれ描いてもらいました。上は幼稚園から下はおじいちゃんおばあちゃんまで全ての世代に、学校だと全てのクラスに描いてもらいました。

四万十町の場合はせっかく続けてきた流れがあるので、これを活かした上で、新しい施設が出来たという前提での物語を作って、そういった展覧会をやりますよという体で、それぞれの地区でどういうふうに描いてもらうのか。各地区や米こめフェスタで、そして描いてもらったものをどういうふうに展示するのか。ぜひその実験も含めて。やった結果はきっと新しい施設作りや、作るだけでなくその施設が始まって色んなイベントをやっていく上での材料になると思います。

その形でやっていくと、気運を盛り上げることにも大きく寄与すると思いますし、色んな成果が得られると感じました。

(内田委員長)

ありがとうございます。

そういう意味では、読書感想画は小学生までですか？

(図書館員)

一応、読書感想画は小学生までです。読書郵便は小中学生対象ですが、今は小学校だけが

主です。

(内田委員長)

小学校を中心にこれが回っているが、李さんのおっしゃった違う形でもいいから、中高生や他の若者にも同じように描いてもらう場面があってもいいということですね。どのタイミングでそれを描いてもらうか、それはまた（話し合いが）必要かもしれません。

(酒井委員)

その点で言うと、前回に宿題として持ち帰った、投書箱を置くとかノートを回すとか、あいつの話はどうなったんでしょうか。

それこそ紹介していただいた柏市の図書館では、関わった人たちの名前が石碑に刻まれて、そこが名物スポットになっていることを考えたら、作る前の段階で関わるための受け皿が見える化されたら、みんなで色々要望を言うこと自体に慣れると思います。

今のままだとどこに何を言い上げていいかわからないし、いきなり問われても答えられないし。色んなものがぶつ切りになってる印象があります。

前回のパブコメを HP で見ました。パブコメの意見のやり方も知らないままに出してしまうと、回答がすごく冷たい印象を感じました。せっかく一生懸命言ってくれているのに、それに対して 2、3 行で終わってしまう。あれを見ると、意見を言ったって通らない印象があると思いますので、そういう面からも育てていける受け皿を先に見せてもらいたいし必要だと思います。

(内田委員長)

ありがとうございます。

そうなんですよね。委員会ではこうしてやってみますという話にはなっていますが、それではまだまだ充分じゃないというのは確かです。

前回の箱やノートの話も仕組みとしてやると形式化しちゃうんじゃないとか、もう少し柔軟に動けるところで動いてはどうかという意見も一方でありながら、どうやって声を聞くかと、聞き方によって知識や意欲が上がる取り組みができるかが難しいのですが。

少なくとも米こめフェスタでは取り組んできたことを集約できるようなイメージはあります。それまでに私たちがどうするかですが。

HP は作っていただいて議事録を初めとして色んな取り組みや、基本構想へ至るプロセスも丁寧に書いていただいています、それだけだとやっぱり、ということですよ。

まず 5 月には渡辺さんの講演会があります。まずここにどれくらいの人に来るのかはすごく大事ですが、元々の主旨は、こういうことを検討していると。渡辺さんを通じてどういう施設を作っていきたいかの気持ちを高める場になるとすれば、この場で改めて聞いてみることだって考えられます。それはこの委員会が何を聞きたいかで、全員でなくても、終わ

ってから感想を書いていただくことなどを考えるとすれば、そこは一つのチャンスです。
とにかくたくさんの方に来ていただくには呼びかけることも必要かもしれません。

(酒井委員)

四万十町内でも文化的施設が2022年度に出来るという話題が盛り上がっていない、知らない人のほうが多いと思うんです。

この渡辺さんの講演会も、渡辺さん自身に興味がある方は目を引かれるかもしれませんが、文化的施設整備のために来られるんだと繋げる人は少ないと思っています。

それでいくと、HPに今までの議事録等を貼っていただけていますが、ここに「意見をいつでも募集します」という欄があるとか。

今すぐできることと言えば、ケーブルテレビで文化的施設が出来ることを紹介するといった働きかけがないと。私の周りでも「文化的施設ってなに？」とか「新しい図書館は本当に出来るの？」とか、全く知らない人が多いので、そちらが急がれると思います。

(内田委員長)

そういう意味では広報のやり方や情報公開でやれることがあるんじゃないかということで、事務局に考えていただいて終わりではないですもんね。

(事務局)

ケーブルテレビや役場の広報にも差し込んでいきます。

この後で言おうと思っていましたが、委員の皆さんにも講演会のポスターをお渡しして、あちこちに貼ってもらいたいです。

広報も色んな形で発信してますが一般の方には知られてないという、町としての課題があるので、町全体で検討していくべきことではあります。ただ、今できる範囲が町のHPやケーブルテレビ、町の広報誌だけでして、今のところはできる範囲でやらせていただくということです。

(ARG 岡本)

よろしいですか。

なかなか難しいとこだと思ってまして、この渡辺さんの講演が町民のさほど意識してない方に認識していただくきっかけだと思って、それなりに知られている有名な女優さんをお願いしました。

「女優の渡辺さんが来るから聞きに行くか」という方々に来ていただいてよいと思っています。渡辺さんには図書館や地域づくりの話をしっかりしていただくようお願いしているので、おそらく女優さんの話を聞きにきたつもりが、彼女自身、町づくりに色々関わっている方なので、落差のある話を聞いた町民の方々は自分たちの町でこういうことが進んで

るんだと気づいていただけるんじゃないかと。

ですのでぜひ皆様からも近隣の方々にとにかくチラシを配りまくっていただけると有難いです。

酒井さんの提案で重要だと思ったのは、その日に時間をちょっとは取れると思うので、町民に今こういう検討委員会が動いていますと、例えばこんなワークショップをやったりしますよと示して、関心を持っていただく。前回出た町内交換ノートみたいなのをその時にお渡しすることができたら一番いいのかと思います。

皆さん日々の生活がおありですから、一月二月空いたら忘れちゃうので、鉄は熱いうちに次の講演会でノートを手渡して「ハイお願いします！ 今日の感想からでもいいので、書いて、隣近所に回してくれますか？」「書けたら図書館に持ってきてもらえますか？」とできると一番いい感じがします。

私からの提案ですが、なるべく役場主体じゃないほうがいい。役場の生涯学習課から町民の皆さんお願いしますってなっちゃうと、なんとなく活発にならないです。できれば町民同士での交換ノートにしたほうが継続するでしょう。役場がやっちゃうと、役場に頼まれてるからとりあえずやとく、何回転かして終わるのが目に見えてます。町民同士でお願いする形であれば、「〇〇さんのお願いだからやってみるか」というふうになると思います。

これからの文化的施設の盛り上がりを考えた時に、一番大事なことかなと思います。

最後は、町全体の共通課題意識になるのは用地の決定以降です。用地さえ決まれば地元紙に載ります。かなり大きな扱いになると思います。地元紙に載るというのは非常にインパクトがあります。特にシニア世代に確実に届くので、そこは長期戦の気がしますね。計画策定の中で場所決定は絶対に必要になりますが、これは町役場に調整事項の多いことなので、いつになるかは分かりませんが、少なくとも今年度中のどこかで決まるはずですので、その時に向けて撃てる弾を全部撃っておく必要があります。

(内田委員長)

ありがとうございます。

戦略的な面も含めてアドバイスを頂きました。どうでしょうか。

(酒井委員)

すみません、ちょっといいでしょうか。

それだと渡辺梓さんの講演前に委員の面々で知った間で相当頑張ることになりますが、その際に、四万十町内ってボランティアで本を好きなお母さんや年配の方もいますし、元気で活躍されている方もいっぱいいるんですが、そこへの繋がりを、私たちは直接持つ人ばかりではないわけで、そうなったら、役場だと保健師さんとか、地元のボランティア団体とすごく縁の深い町民課の方とかいると思うんです。そういった方にも協力してもらわないと、この人数だけでは手一杯になるので、町民同士でやるのが前提としても、役場の方にも協力

してもらいたいです。

(事務局)

すごく真面目に考えていただいてありがとうございます。

役場としても主催は教育委員会ですので、あらゆる伝手とコネを利用して周知することは考えております。

(刈谷委員)

講演会会場のキャパはどれくらいで、大体何人入れば成功と言えるか教えてください。

(事務局)

会場は四万十町農村改善センターの多目的ホールを予定してます。いっぱい入ったとしたら 200 以上なので、100 人以上入ったらそこそこいっぱいというイメージです。

(酒井委員)

今まで「そこそこ入った」という成功したイベントの内容はどんなものでしたか？

(事務局)

自主防災組織の会などです。ああいう会は団体さん、組織ぐるみで来てくれるので、かなり入ります。

あとは一昨年、おとめちゃんを呼んだ時に 100 人ちょっと入って、この会場がぎゅうぎゅうでした。それが農村改善センターに入ったらまだ余裕がある感じです。

(刈谷委員)

車は停められますか？

(事務局)

この役場と改善センターと、あと旧役場の駐車場も日曜日は空いています。

(ARG 岡本)

近隣自治体から来る方もいるでしょうから、四万十町民のほうが少ないことは避けたいですね。

(渡辺さんには) わざわざ横浜からお越しいたきますし。

(林(一)委員)

このチラシは行政文書で出します？

(事務局)

区長文書の全戸配布で出します。

(林(一)委員)

5月23日といったらちょうど農繁期です。

それと最近の行政文書はたくさんチラシが入ってまして、なかなか読んでもらえない人もいます。

ある程度確実に人を入れるとなると、入場券みたいなものを手渡しで「ぜひ来てください」と渡したら、ある程度は集まってくれるという経験がありますがどうでしょう？

(事務局)

それは今日の帰りに取っていただいて、手渡ししてもらいたいです。それプラス、広報にもくっつけていきます。

(下元委員)

勝手にノート回していいなら知り合い20人くらいは。

渡辺さんの講演会までに、自分の知っている人や職場、団体だけでよければ、私の課題として回らせていただけるならば次回までに回しておいて、そこで意見も出てくるでしょうし、私という相手に対して具体的な話も出てくるんだと思うんですけど、例として皆さんが見れるものになると思うので、試しに回してみます。

(酒井委員)

すごくいいと思いますけど、それこそ町内ノートを講演の後に回してもらうようにするならば、今日から早い段階で、ノートの形式ですよね、どういうふうにとということと、これを広めるってということと2点をもっと早く決めておかないといけないと思うんですけど。それによって下元さんだけでなく他の人も動きやすくなると思うんで。この2点は早めに決まれば有難いと思うんですけど。

(内田委員長)

検討委員会だけで決めたほうがいいですか？

要は、自発的に動くことは悪いことではありませんし、まずやってみようということのほうが動きやすいですかね？

(酒井委員)

その時に内田先生や岡本さんのアドバイスがあれば動きやすいんですけど。

(下元委員)

何か設問するならとか、自由表記のほうがいいのかとか。

(ARG 岡本)

つまりノートを渡された人が、説明なくとも何を書けばいいのか分かるガイドが最初に付いてて、他の人が書いたのを見ながら書けるようにして、とりあえず誰かに渡してください！ というところまでのガイドがないと難しいということですね？

(下元委員)

例に何か自分が書いておいて、それを見てこんなこと書けばいいのか、とか。

(ARG 岡本)

でしたらそれは私が作りましょうか。

ノートはありものでいいですよ。綴じ込みがリングになっている、ちょっといいノート。比較的良いノートにしておけば大切に扱っていただけるので。そういったものを用意して、下元さんにおしゃれな表紙絵などを描いていただけるといいなと思います。そこに説明文をいくつか頭に貼り付けておいて、こういうふうに変換ノートとしていきますよとして回す。それだったら比較的早く出来ると思うので。

よろしければ私のほうで叩き台を作って、先生と役場のほうに確認していただきつつ、最終的に皆さんで確認できる形に仕上げましょう。

(内田委員長)

では、そういうことで。他にもノートを回せば色んな所に回していいかと思います。

ありがとうございます。

やはりこの渡辺梓さんの講演会にどれくらいの人に来てくれるか、そこに力を入れるということですね。色んな手立てを使って多くの人に参加してもらいましょう。

何か他には。

(刈谷委員)

一章のことでお聞きしたいです。基本方針の4-A「図書館・美術館機能の融合」の、融合することでのメリットと融合しないことでのデメリットを教えてください。

(ARG 岡本)

融合しなければ全く意味がないと思っています。

図書館と美術館の複合施設は最近よくありますが、開館時間や休館日が違って、そも

そもから駄目なケースが多いんです。今までの文化的施設の議論の中で、ここは図書館だからこう使う、ここは美術館だからこう使う、というものではないだろうと。

人はその感性によって、たまたまそれが図書館であることが好都合のこともあれば、美術館であればいいこともある。常にそこを行き来できる、一体的な所だったらいいというのが今回までの議論だったと思います。例えば美術の本を読んで創作意欲が湧いて、パッと創造活動に取り掛かれるような形がいいというのが、この会の今までの議論だったと思います。

図書館だからここはこうしないといけない、美術館だからこうしなきゃいけない、ではなく、軽々と、どちらも自由に使えるようになるのが融合のポイントです。

融合しないことのデメリットとは、結局、二つの機能が一つの施設にまとまっても相互に繋がりがないと機能しているとは言えない点です。

昨日、仕事でオーテピアの科学館に行きました。いい科学館ですが、正直言ってオーテピアの中で5階だけ浮いてます。明らかに科学館だけ浮いた存在になっていました。高知市民図書館の本が置かれてはいますが、図書館と科学館が一緒になってる意味はあまりないです。もう少し繋がる機能があってもよかったんじゃないかと思います。ああいうふうにならないほうがいいですね。

そういう意味では、非常に優れた融合事業は「ひろめ市場」です。

どこの店のものを買ってどこで食べてもいい。だからこそあれだけ多くの人が交じり合って繋がって友達になって、優れた文化になってると思います。

そういったところを計画の中で詰めていったほうがいいです。

一章でのご指摘ですけど、具体的に言うと三章に当たる開館時間をどうするかなどで、全体で共通のルールにしようと明記するのが重要ですし、職員に求められる能力にも関わってきます。司書や学芸員の資格を持っていればいいではなく、図書館と美術館、両方の機能を大事にしてバランスよく振る舞える人材が求められているということです。第一章の両方の機能が求められているのだと明記した上で、第三章でだからこういう運営をしましょうとまとめていくのがいいかと思います。

(刈谷委員)

ありがとうございました。

渡辺梓さんの講演会でも前段階の広報も含めて、図書館内で関連本を集めたブースを作るとか、当日の会場にそれらの本を持ってくることもできるのかなと思いました。

(内田委員長)

ありがとうございます。

本当にその通りでして、最後のご提案も素晴らしいと思います。

まさに今、図書館を利用している人たちが、その関連のものが目の前に展示されているという、その機能が求められているから実践していきましょうという、大事な点をお話したい

だいたと思います。

それから、この点にご質問いただいたのがすごいなと思ったんです。岡本さんのおっしゃった図書館と美術館の融合は、ある種のチャレンジです。今回の大事なところで、上手く行くか行かないかも分からないのですが、やっぱりここは拘って作っていきたいです。

それでは、時間も参りましたので、事務局にお返しします。

(川上教育長)

委員の皆さん、本当にありがとうございます。

今日聞かせていただいて、これから出来上がる文化的施設が未来の進展に繋がらなければいけないと思っております。そういった意味で、こういった会も一つ、色んなやり方があります。

ARGの岡本さん、李さんには、本日も来ていただいて色んなアドバイスをいただきました。委員の皆様からも色んなご意見も頂いて、気運を盛り上げるべく、講演会やノートの話も出ました。こういったことは文化的施設を建設するに当たって町民の関心と認知度を上げていくでしょう。

できることを一つ一つやっていかなければいけないし、我々も、町民が将来「こういった施設が出来てよかった」と思えるように、また将来に通用するように、子どもたち孫たちの代まで繋がる施設にしたいです。皆さんの意見も聞きながら、四万十町ならではの施設にしていきたいと思っております。

それと、私が皆様の一つ伝えたかったことがあります。教育関係の多くの会合の中で、文化的施設の会議録を読まれている方は結構おまして、「四万十町の取り組みはすごいな」と、「うちの自治体でも何かしてあげないといけないじゃないかと発破をかけられた」という市町村もありました。このことは委員さんの熱心なご協議を頂いていることで、町外に関心を持たれています。町内にもそういう関心を向けてもらって、素晴らしい施設が出来ればと思います。

本年は皆様方に、ほぼ月に1回のペースでお集まりいただくスケジュールになっております。しかしそれが将来のこの施設が出来上がった時には刻み込まれると私は思っています。

皆様にはまたご協力いただきまして、素晴らしい施設が出来上がることを祈念しまして、感謝と私からの感想と共に挨拶とさせていただきます。皆さんありがとうございます。今後ともよろしく願いいたします。

(事務局)

最後に事務局から。

渡辺梓さんの講演会のチラシとポスターを後ろの席に置いてありますので、何枚でも持って行っていただいて、貼れる所があれば貼っていただいて、宣伝もしていただきたいです。

それと、渡辺梓さんは仲代達矢さんの無名塾でも活動をされています。谷干城ミュージカルといった演劇に携わる方にも来ていただけたら一つの演劇の勉強にもなるし、今後繋がりが出来てまた来ていただけることになったら良い話にもなりますので、ぜひお伝えください。

よろしく申し上げます。以上です。

(刈谷委員)

これはWEBで見ることができますか？

(事務局)

HP掲載を考えております。データ関係のやり取りの途中です。

(内田委員長)

それでは閉会とします。皆さん、ありがとうございます。

3. 閉会